あぶらむ通信

第19号　1997年8月　あぶらむの会発行

〒509-41　岐阜県吉城郡国府町宇津江　TEL 0577-72-4219

あぶらむの里　諸魂庵
安部　正則　氏作

飛騨たより

あぶらむ通信’９７夏秋号をお届けいたします。

年ごとに夏の暑さが厳しく感じられます。地球の環境変化によるものでしょうか、それとも年齢のせいでしょうか。あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。長ーい長いご無沙汰をお赦し下さい。気がついたら前号よりもう一年が経っていました。

１年経つのも早ければ、１０年経つのも早いもので、あぶらむの会が発足して１０周年の節目の年を迎えました。皆様方の多大なご協力のおかげでやっと、少しは心安らぐあぶらむの里となってきました。この間、短距離競争ランナーのように全速力で走り通してきたためか、あちこちに疲労がたまりかけているらしく、心は熱しているのですが、身体の方のレスポンスが少し鈍くなってきているような状態です。仕事の途中で腰を伸ばす回数も多くなってきました。しかし、私たちの社会の抱えている問題を考えるとそんなことはいってはおられません。働き人のことも含め、この節目の年にこそ、将来に向けての体勢づくりをしっかりとしなければと思っています。

まず最初に報告しなければならないことは悲しく、辛い出来事です。あぶらむの会の代表世話人として、創立時より多大な労をおとり下さった八代崇先生が逝去されました。６５才でした。八代先生とは１９６８年に初めて沖縄でお会いして以来、牧師の卵としての神田キリスト教会時代や立教時代と、ずっとお世話になりっぱなしでした。これから少しずつご恩返しをと思っていたところですが、少々早い別れとなってしまいました。

また動物写真家としてアラスカの自然を撮り続け、私たちに預言者としてのメッセージをおくり続けてくれていた星野道夫さんとの突然の別れも、大きな痛手でした。星野さんが逝ってもう１年、この間私は彼の著書を幾度も幾度も読み返してきました。彼が私たちに伝えんとするメッセージもさることながら、彼の透明感溢れる文章に圧倒され、私は恥ずかしくてペンを執ることが出来なくなってしまいました。なぜなら、彼の文章が鏡となり、そこに映し出される自分の姿に、私は自分の、そしてあぶらむの働きの現在と将来をいろいろと深く考えさせられてしまい、ペンを執る手がますます重くなってしまいました。

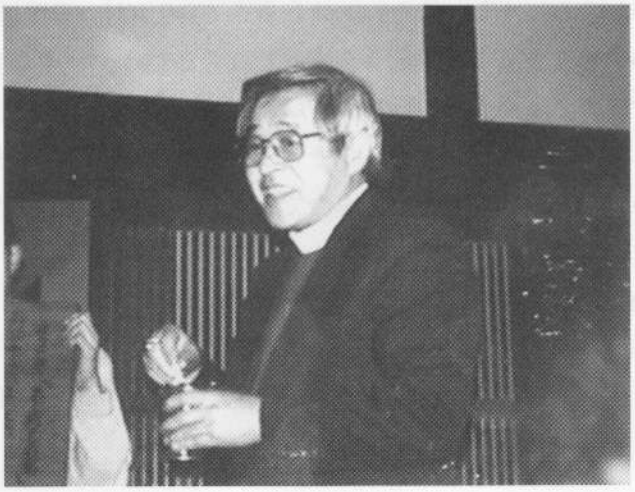
昨年より毎夏、遠路四国の松山よりはるばるあぶらむの里へ訪れて下さる、清水秀明ご夫妻がいらっしゃいます。清水さんは地元で「光明クリニック」を開設しておられ、医術だけではなく、精神的な深い配慮も加え、病気を病んだ人の総合的癒しを実践しておられるお医者さんです。そんな清水さんから頂いた手紙にこんな一文がありました。「人の生と死を看ながら、いつも思うことは、生きている今を生き通すことで過去と未来

をつなぎ、魂とも言うべきものを成長させてゆく一つの過程ではないかと・・・。病も死も、その時々で必要なもので、大きな区切りであり次の一歩であるという気がしてなりません。人の臨死に出会う際、メッセージを受けます。ある人は、「愛はすばらしい！」とほほえみを浮かべて旅立ち、「ちゃんと一人で逝く準備が出来たから心配するなよ」という人があり、最後までなき騒ぐ人あり、様々ですが、やはり、人は生きたように死んでゆくようです。生き方が死に方そのものになって展開されます。だから、いかに生き、自分らしくあるかということの大切さを思わずにはいられません。」

この１０年、かたちとしてのあぶらむの里作りに全力投球していた私、それが一段落し、この与えられた空間を用いてのあぶらむの働きというソフト部分を考えて行かなくてはならない最も重要なときにおける大切な人たちの死（沖縄愛楽園の松村行雄執事の死や、他の入園者の死も大きなきっかけとなりました)、「死を通して生を考える」、「生を通しての死への準備」、生きることをもっともっと鮮明にして行かなければならないのに、それを怠っていた自分に気がつき始めました。「還暦」という人生の暦における区切りまであと１０年ほど、先に逝ってもなおあぶらむを導いて下さっている人々に応えうるような働きをしなければと思っています。幸いに今年は有能な働き人が与えられました。スタッフ一同一丸となり、多くの問題を抱え込んだこの時代のただ中にあって、真摯な気持ちでひとつひとつ働きを積み重ねて行きたく願っています。今後ともあぶらむの働きに皆様のご支援をお寄せ下さいませ。末筆ながら皆様のご健康をお祈りいたします。

１９９７年８月

あぶらむの会代表　大郷　博



あぶらむの宿落成式にて「聖水」で祝福して下さる在りし日の八代先生（90年11月）

さようなら八代先生 さようなら星野道夫さん
またお会いできる日まで

病気と八代先生

「おもしろいものを見せようか。これ術後３日目、５日目…。何ならどれか一枚上げるわ。好きなものもってって。」

脳腫瘍の手術をされた八代先生を見舞いにいった私。いささか緊張気味で病室に入った。そんな私を気遣かうかのように、先生はニコニコしながら数葉の写真を見せてくれた。それは手術後の頭部を自分で撮った実に生々しい写真だった。先生は病気を茶化していた。

「この人は自分の病気の大変さを分かっていないのヨ」と洋子夫人。そばでニヤニヤしている先生。

なんぼ病気音痴の人であったとしても、その深刻さを知らないはずはない。大病をも茶化してしまうその姿に、私は八代先生の底知れぬ姿を見た。

脳腫瘍と肺ガンの手術を終えて後、先生は産声をあげたばかりの「あぶらむの里」を訪ねてくだすった。他の来客も重なり、その日、天然の岩魚の骨酒をふるまった。大ドンブリによく焼いた魚を入れ、それに熱カンの酒を注ぐ。岩魚のそれは天下一品の味。参加者全員で一口ずつ、まわしのみする。

一周目、ドンブリが先生の前にきたとき、「これは私の大好きなものですが、現在は医者と女房に禁じられておりますので失礼します。」と次に回された。二周目、「皆さんおいしそうですね、また、ニオイもかぐわしく」。三周目、「ちょっとニオイをかぐだけはいいですか」。四周目、「ちょっとなめるだけ、いいですか」。五周目、「ちょっと一口だけいいですか」。先生のあまりのいじらしさに、「先生、この際好きなだけのまれたらどうですか」。と言った私。「そうか、そんなら、ちょっとだけいただくわ」。「あぁーうまい！死んだ後、八代を偲ぶ会で、遺影にむかって献杯と言われるより、生きているうちにのむ酒のお方がうまい！」。そう言いきった先生の一言、私は忘れることが出来ない。

すごい人だった。天国での再会が楽しみな人でもある。

神田キリスト教会誌「おとずれ」第７１号より

弔辞

星野道夫さん、大郷です。「今度は大郷さんがアラスカを訪ねる番ですヨ」、あなたのそのお誘いに9月末にお訪ねする予定だったその矢先に、このようなかたちでお別れしなければならないことに、胸がはりさけんばかりに悲しく、痛みを憶えます。

5年前、お姉様の京子様より、「これ弟、道夫の本です。読んでやって下さい。」といって、「アラスカ　風のような物語」をいただきました。それがあなたとの出会いでした。私が圧倒されたのは、数々の写真もさることながら、あなたがつづる文章の透明感でした。そしてその文字は、一度も見たことのないアラスカが眼前に立体感をもってせまってくるのです。それが私のあなたへの憧れの始めでした。

こんな透明感のある文章を書く人と会ってみたい、あなたと直接お会いできる日を切望してきました。

94年2月、念願かなってあなたは私たちの住む飛騨の地を訪ねてくれることになりました。汽車の到着を待つまでの間、私の胸は高鳴り続けました。他方、列車から降りてきたあなたの顔は対象的で、「あぶらむの会って何だろう。大郷とはどんな人間なのだろう。」と、あなたの顔には不安そうな思いが満ちていました。これが私たちの出会いの始めでした。

お会いしてまだほんのわずかな月日しかたってないのに、私のそして私たちの心の中に占めるあなたの存在感の大きさは一体どこから生まれてくるのでしょうか。

京子さんからいただいた本、あなたからお送りいただいた本を、私は書店で求め、兄弟のようにしてきた私の甥におくってきました。あなたの出来事を知り、彼の妻はこのような手紙をおくってきました。

「あまりにも悲しいニュース、何といっていいのかわかりません。星野さんの本の中の、“妻の直子が妊娠しました”という言葉が浮かんできて、お会いしたこともない方なのだけど、どうしてあんなにも一生懸命生きてらして、純粋な方が、亡くならなければならないのか、信じられません。進さんもこの二日ほど寝れない日々を送っています。“会ったこともない方の死だけど、苦しくて悲しくて仕方がない－”と。

どうしてペンを執ったのかわからないけれど、進むさんと二人、心から星野さんのご冥福をお祈りしております。」

彼女のこの気持ちは、あなたの本を通してあなたと出会った多くの人々の気持ちでしょう。しかし、人の心に占めるあなたの存在感は一体どこからくるのでしょうか。

あなたは私にこんな話をしてくれました。

「撮影に出かけるような所は道などありません。セスナ機で目的地に入り、2週間、3週間後のむかえを頼むのです。その間僕はじっとそのところに留まり続けるのです。アラスカの地は被写体を追い求めてこちらがあちこち移動するのではなく、被写体となる動物たちがこちらへやってくる時をただじーっと待つのです。ただ、ただ、地平線を見つめて生きる日々なのです。目的とする写真が思ったより早く撮れたとしても、パイロットとの約束の日まで、じーっとその地に留まらなければならないのです。アラスカの生活はそんな毎日なのです。」

地平線を見つめて生きる日々あなたはその中で、あなたはあなたがそれまで出会ったこと、それが人であれ、出来事であれ、一片の言葉であれ、それらをひとつひとつ真摯にかみくだき、あなたは自分の言葉、自分の生き方としてきたのではないでしょうか。そのようなあなたの中に、私は真実を求めてやまない求道者の姿を見るように思いました。

全くの偶然とはいえ、あなたの悲報は、あなたと私を橋渡しして下さったお姉様の京子さんが、私どもに滞在していらっしゃるときでした。京子さんは、年老いたご両親には自分の口からこのことを伝えたいと、一刻も早くご両親様のもとへ帰ることを希望され、私もささやかながらそのお手伝いをさせていただきました。

その時お父様は籐の安楽椅子に身体をなげだし、中空を見つめ、ぼう然としていらっしゃいました。そんなお父様に京子さんは、「お父さん、道夫をアラスカへ送ったときからこの日のことを覚悟していたでしょ」といいました。それを聞いたお父様は、「そうだね、そうだね」と二回、自分に強く言い聞かせるようにうなずかれました。なんと壮烈な慰めの言葉でしょうか。この言葉の中に、あなたのそしてあなたの家族のすべてが集約されているように思います。

あなたはいいました。「動物たちの真実な姿を撮るためには、人間は身構えてはいけない。護身用にと銃を持ったその瞬間、動物たちは警戒し、真実な姿を見せてはくれない。」と、あなたはいつも丸腰で写真を撮り続けました。愛くるしい動物たちの姿の背後に、いのちを賭しているあなたの真実を見ます。

「真実なるものの発見は、いのちとひきかえに!!」というあなたのメッセージを感じずにはいられません。

しかし、ここに一つの不思議が感じられてなりません。この真実なるものを求めてやまない求道者のようなあなたの口から、「祈り」という言葉が一切でてこないという不思議さです。これまであなたの著書に全て目を通してきましたが、あなたの口から「祈り」ということを聞くことがありませんでした。

だが、絶筆となった「ナヌークの贈り物」の中に、あなたは初めて「祈り」を口にしましたね。あなたの中にこの「祈り」という言葉を真実なるものとするために、あなたのこれまでの働きがあったのですね。

一人の少年とナヌーク（白熊）とのやりとりの中であなたは語ります。

「少年よ、わたしたちはアザラシを食べ、アザラシは魚たちを追い、
魚たちは海の中の小さな生き物を口にふくむ。
生まれかわっていく、いのちたち。」

「人間はクジラに向かってもりを投げ、
クジラはサケをのみこみ、
サケはニシンをのみこむ。
生まれかわっていく、いのちたち。」

「オオカミはカリブーをおそい、カリブーたちはコケモモの実をついばみ、
フクロウは鳥たちのヒナをおそい、鳥たちは小さな虫を食べる。
生まれかわっていく、いのちたち。」

「おまえのおじいさんの最期の息を受けとった風が、
生まれたばかりのオオカミに、最初の息をあたえたのだ。
生まれかわっていく、いのちたち。」

「少年よ、消えていくいのちのために祈るのだ。
おまえのおじいさんが、祈っていたように。
おまえのその祈りこそが、
わたしたちに聞こえる人間のことばなのだ。」

「われわれは、みな、大地の一部。
おまえがいのちのために祈ったとき、
おまえはナヌークになり、
ナヌークは人間になる。
いつの日か、わたしたちは、
氷の世界で出会うだろう。
そのとき、おまえがいのちを落としても
わたしがいのちを落としても、
どちらでもよいのだ。」

他者のいのちによって生かされているというその単純な真実を見失ってしまっている私たち、今日私たちが直面している危機的と思われる数々の出来事の病根をあなたは鋭く、そして優しく指摘しています。

「祈り」を通して、いのちとは何か、真実とは何かを語りかけたあなたはもういない。しかし、あなたはいう。

「自然の終わりはいつも何かの始まりである。」

「いきものは息をつくるもの、風をつくるもの。」

「人生は何かを計画しているとき起きてしまう別の出来事のこと」

純粋であることや真実であること、祈りや生きるということを見失った私たちの世界。しかし、あなたの生と死を通して、私たちの中に何かが始まろうとしている。あなたはその起爆剤となって逝った。あなたは真の「サワドウ」ーアラスカ魂をもった人ーです。

お別れの言葉は尽きません。最後にお約束いたします。

一つに、あなたの偉大な仕事を広く多くの人々に伝えるべき記念館を、お仲間の皆さんと協力し、実現させたく心より願っています。

二つに、残された奥様直子さんと翔馬君のために、たとえお二人がどこで生活されよ

うと、厳しい冬を暖かくやり過ごすための「薪づくり」に、わたしのいのちある限り、薪をお届いたしますのでご安心ください。

星野道夫さん、どうぞ安らかにお休みください。またすぐにお会いいたしましょう。それまでの一時、さようなら。

１９９６年８月２０日

大郷　博

星野道夫さんの著書をお伝えします。是非ご一読ください。

＜写真集＞

○アラスカ　風のような物語　／小学館

○アラスカ　極地・生命の地図／朝日新聞社

＜エッセイ集＞

○アラスカ光と風　／福音館書店

○イニュニック　／新潮社

○旅をする木　／文芸春秋

○森と氷河と鯨　／世界文化社

○ノーザンライツ　／新潮社

国府町民会館で講演した在りし日の星野さん　(94年2月)

あぶらむ農場

加藤　正

４月２５日、あぶらむで今年の農場開きを行った。

今年は宿の前の畑１０ａに加え、今までの水田を畑に替えてジャガイモとスイートコーンを植えた。奥飛騨の山にも春が巡ってきたのだ。

宿の前の畑はいちごが春の陽を受け、今伸びようとしているが、昨年の６月のいちごは毎日たくさん採れ、心から幸せな気分になったものである。今年も楽しみだ。

ここ数年のあぶらむは、畑でいろいろ野菜を作ってきた。このあぶらむは標高が高く、東北北部や北海道と同じ栽培時期で管理することも少し分かってきた。

いろいろな作物の収穫が多くなったことは嬉しいことだ。

しかし、収穫よりも日々の土よせ、草取りなど管理のなかでいきいきと日々変化していく作物達の生様を見ながら「育てる喜び」を感じる人々が存在することこそ、うれしいことであり、あぶらむに農場の必要性を感じているところでもあるわけだ。

「あぶらむ通信」NO・18で長田まどかさんが書いている内容がそうだ。

それを少し掲載させてもらうと、『特に、日々の生活のなかで「農作業が好きだ」と感じるときが幸せだ。私には、収穫の喜びよりも作物が成長してゆく過程を見守る喜びの方が大きい。移動することができないが故に、彼らの獲得した生きていくための手段はたくましく、種によってさまざまなスタイルはほれぼれと見とれてしまうほどに美しい...』 今年スタッフとしてあぶらむで活躍してくださっている中村真紀さんも、4月19日に蒔いたほうれんそうが7日たっても芽が出てこないので心がキュンと痛くなったらしい。8日目にやわらかい芽が出たときは、さぞ、いとおしく思えただろう。

心がキュンとなったのはやはり、「育てる喜び」の心が根底にあるのではないだろうか。少し大げさに言えば、「植物を育てる」ことは自然を観ることや生命の営み、いのちの根元にかかることを教えられる場所ではないかと思う。

植物を育てることは時間のかかることであり、相手の成長を待つことであり、それは忍耐することでもあるが、このことを経験することにより、心には「相手を思うこと」「おもいやり」が育まれ、やがてそれは「やさしさや」や「愛する」心として醸成されることだと思うのである。

昨年から少しずつ子供たちと農作業や食事を作ったときの印象も報告したい。

稲の除草を行ったとき、真夏の炎天下、稲の葉先で、体をチクチクされながら、田の草取りを行い、「食べるってたいへんだ。しんどいなぁ。」と食べ物を作ることは楽しいことばかりではなく面倒くさいことを実感していた。

8月に鶏をつぶして食べたときの子供の反応は「今まで生きていたトリさんを殺したのだから、きれいに食べなかったら申し訳ない」と食べることは悲しみを伴うことであり、真剣さが伴うこと、生けるものへの畏敬、尊敬が生まれていた。

こんなことから、子供達は種を蒔き、それを調理してたべるようにするまでにはずいぶん時間と労力がかかり、大変さと真剣さを学んだように思う。

しかしそのことは、ひとつひとつの出来事を通して真面目に考え、人としての生き方などを考える心が培われるのではないだろうか。

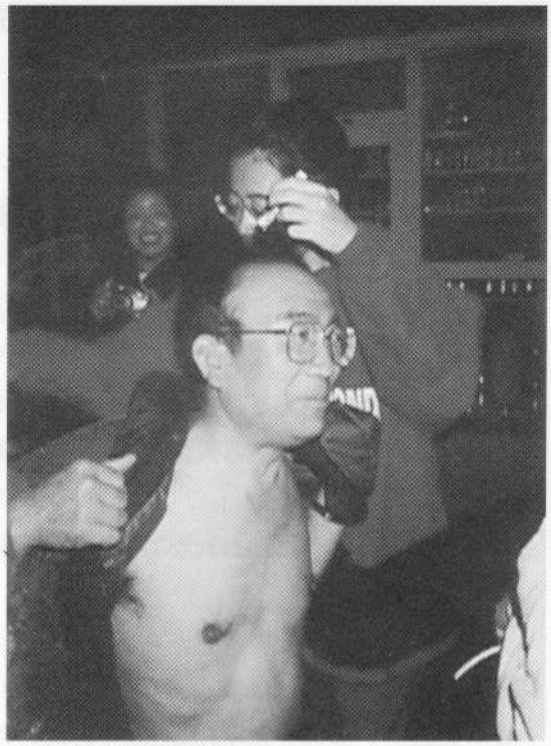
土や作物に触れていると、心が穏やかになるのは、子供達ばかりでなく、私自身がそうである。

土を耕し苗を植える。体いっぱい動かした後で収穫したものをおいしく食べることで、ゆったりした心になるのは、土や作物は人の心を癒してくれる力があるのだろう。

子供達（大人も含めて）との農業体験や自然体験はもっと増やしたいと思っている。

5月15日、電話の向こうから真紀さんの弾んだ声が飛び込んだ。「いちごの葉がね、毎日毎日ぐんぐん伸びているんですよ。すごい伸びなんですよ。」と、いちごの生命の躍動に新鮮な驚きを感じての電話だった。

いちごの元気な様が頭に浮かび、今すぐにでもあぶらむに飛んでいきたくなった。



農業指導から離れた加藤さんのネパールでの素顔

私は年に数回あぶらむにお世話になっている。農場の土なぶりをさせて頂いているが、あぶらむの吉田さんをはじめとするスッタフで農場いっぱいの野菜や稲を作っている。

それは農業体験学習と共にあぶらむの宿に来られた方に新鮮な野菜を食べてもらうことであり、おみやげであり、好きな時間に農場に出られ好きな作業をされることであり、自分で種を蒔かれたり、観察されたりする農場を提供しようとの考えからだ。

ありがたいことに春から冬になるまで、畑や田はいろいろな野菜が生育を続けている。私自身、ゆっくり、たっぷり、心ゆくまであぶらむ農場を満喫し身も心もリフレッシュさせて頂いている。

〈追記〉

ほうれん草の発芽の遅れは、種子の芽だし処理の説明をせず、そのまま蒔いてもらったのだから日数がかかったのであって、悪いことをしたと反省している。

私のために喰われてしまった<いのち>たち

あぶらむ長期滞在者　西平　直

今年もまた、ひと夏、あぶらむの里でお世話になっています。

ここに来ると、仕事ができます。それはそうでしょう。自然に囲まれ、電話も来ない、食事もおいしい・・。よく、そう言われます。

確かにそうなのですが、本当は、それだけではないのです。

ここで暮らしていると、自分のすべき仕事は何か、考えざるを得ないのです。

「自分は何を仕事とする人間か。どんな役割を果たせばいいのか。何のために自分を役立ててゆけばいいのか。」

自分に問い掛けずにはおれなくなるのです。

大郷先生は、木工作業をしたり、力仕事をしたり、依頼された講演に出かけたり、日々違った仕事をしては、クタクタになって、夕食につきます。

育さんは、三度の食事を作り、宿の一切に気を配りながら、文字通り、身を粉にして働き続けています。

女性スタッフたちは、かいがいしくキッチンで働き、時には力仕事に加わりながら、にぎやかに周りの皆なをなごませてくれます。男性スタッフと十代の若者たちは、今日は田んぼ、明日は薪割り、次は木工と、汗びっしょりに、日々奮闘し続けています。

そうした「働く」人たちと同じ食卓につく時、さて一体、自分はどんな仕事をしたか。同じ食事をいただくに値するだけ働いたか。自らを、省みざるを得ないのです。

二・三日、世話になるのとは違います。ひと夏ずっと生活を共にさせていただく時、有り難さと、申し訳なさの入り交じった、問い掛けが、ひしひしと身に迫ってくるのです。

でも、誤解しないで下さい。その「仕事」は、「生産性」とは違います。効率よく利潤を上げる生産の論理とは違うのです。

そうではなくて、与えられた今日一日の恵みを、十分にいかしたかどうか。その人なりの、それぞれ違った「仕事」。いわば、「地上におけるつとめ。」です。

お年寄りの話を聞き続けることが「つとめ」の人もいます。人によっては、体を休め、心身ともに整えることが「つとめ」です。一日誰とも話をしないで、ひたすら祈り続ける「つとめ」だってあるのです。

私たちは、いのちを喰って、生きています。他のいのちを殺さなくては、生きられな

い。その<いのち>のエネルギーを受け取らなくては、生きのびてゆかれないのです。
いってみれば、その「私たちのために喰われてしまった<いのち>たち」に対して、恥ずかしくない一日を送ったかどうか。
どんな仕事をするにしても、どんなつとめを背負うにしても、その問いからは逃れられない。私たちは、日々、その問いに対して、自分の生き様を通して、答えてゆく責任を負っている。
厳しいけれども、それが厳粛な事実なのだろうと思います。

自然に囲まれた、ゆったりと時の流れる、(でもいくらでも仕事のある、) ここあぶらむの里に来るたびに、一体自分は何をするために生きているのか、何をするために生かされているのか、心の底から問い掛けられてしまうのです。

スタッフ及び長期滞在者紹介

９７年の夏、あぶらむで暮らしている面々は総勢８人です。大郷夫妻と６人のメンバーで毎日笑いの絶えない食卓です。その６人を紹介します。

吉田　修

４月より、あぶらむで働いています。ここでの主な仕事は、木工と農業です。自分の目指すところは、自分の生活に必要なモノはできるだけ自分で作るコト。様々な意味で、様々な規模で、「自給率」というものを上げていけば、環境問題は低減できるんじゃないかと考えています。
好きなもの、山、酒、風呂、メシ・・・・

馬橋 謙

高校を卒業してからここでお世話になっています。それまでサッカーぐらいしかやったことがなかったので、ここでの毎日の仕事はいい経験です。これから自分の将来の目標が定まるようにいろいろと考えてゆきたいと思っています。頑張ります。

神山　拓史

僕はあぶらむに来る前、1年間ずっと家の中で過ごしてきました。たくさんの人と接するのが苦手で、外に出ないようにしていました。でもそんな生活を繰り返していたら、どんどん元気じゃなくなっていって、何か始めようと思ってここに来ました。ここでの生活で、人と接することが嫌じゃなくなってきたし、少しずつ元気になってきました。これからももっと自分が良くなって行けるように頑張りたいです。

佐々木　太郎

僕は今年の4月から、あぶらむでお世話になっています。今年、中学を卒業してきて今、斐太高通信の一年生として、勉強をしながらここで木工や土木などいろいろな仕事を教えてもらっています。だんだん勉強と仕事の両立にも慣れてきて、毎日初めてのことばかりなのですごく楽しいです。早くもっとここの生活に慣れてゆけたらいいと思っています。

中村　真紀

3月に大学を卒業して4月からここにいます。学生時代は教員を目指していたのですが、フィリピンの農村を訪ねるなどの機会を通して、今の自分は頭でしか分かっていないことが余りにも多すぎるように思え、少しまわり道をしたくなりました。そんなときあぶらむに出会いました。

折原　美香

飛騨、そしてあぶらむの里の自然、皆様のなかで毎日楽しく過ごさせていただいています。4月末より、日本青年奉仕協会の'一年間ボランティア計画'に応募し、あぶらむに来ました。一年間ボランティアの活動先を希望する際、あぶらむの紹介文に即、ひきつけられました。人と自然、自分自身、またその多くのかかわりを見つめたいと思っています。

後列左から　馬橋、佐々木、吉田
前列左から　折原、大郷育、神山、中村

寄付者一覧（8月1日現在）

宮城正子／谷野将崇／永井道子／宮下令子／日本聖公会京都教区社会部／広瀬留雄・洋子／大門宗裕／水谷靖・登美子／日本キリスト教団京都教区ネパールワークキャンプ／大家俊夫・陽子／鹿住泰治／斉藤友子・慶三／高沢敏子／馬橋 奨／岐阜バプテスト教会／富山聖マリア教会婦人会／田中尚代／橋本禮子／尾針恵子／倉敷知恵子／上原栄正山田益夫／尾崎嘉代子／門田圭介／近藤真紀／沼尻全弘／鎌田玲子／吉植よし子／住田篤／原川恭一／東晃・瑾子／坂本吉弘／一丸直也／清水秀明／壹岐健夫／武原春美／小沢福夫／石井秀夫／久保田順／小野裕／石森牧・真子／林英夫／小畠綾／久保田彰／徳田その／鈴木正士／杉山千鶴子／中村ひろ子／菊澤満喜子／佐々木優／小笠原スワ／一柳百／紅林みつ子／熊谷一綱／木村きく／佃寿子／日下初子／田尾兵二／萩尾信也・出穂／ショーテック・ホームサプライ／瀬川信子／西村睦子／高島光江・富美江／森田トミ／栗原千代／豊里正子／松井明子／菊地栄三／祈りの家教会／嘉数弘子／富永隆史・敦子／磯貝澄美子／東京聖テモテ奉仕会／伊東勇／島谷晴朗／木下春子／横浜聖クリストファー教会／朝比奈誼／長田まどか／堀内昭／牛丸忠男／松尾隆／高瀬留美／三原一男／京都復活教会／島田信弥／葛飾茨教会／岸井孝司・ミツ子・篤史／松丸一夫／松岡和夫／吉岡邦秀

新規会員（８月１日現在）

〈正会員〉岩瀬祥子／桑田澄子／永井幸子／小野美知江／馬橋奨／庭野節子／宮内陽子／細江恵子／宮下令子／太田征子／木村良己／小林佳子／中村正克・啓子／飯島信也／佐々木道人・まり／田原貞子・正之／片桐孝・多恵子

〈賛助会員〉今井隆／伊藤一枝・志保／清家美佐子／島並正治

編集後記

今年のあぶらむはにぎやかなスタートとなりました。宿の利用客がいなくても、８人の生活がしっかりと続くのです。このマン・パワーをもっともっと活用して行かねばなりません。その手始めとして、あぶらむ通信を自分たちで活字に打ち込みました。そして高山在住の大森清孝さんの協力により印刷へとこぎつけました。年２回発行の予定が１回に足踏みしています。このエネルギーを用いて年２回の通信をお届させていただきたく思っています。

末筆になりましたが、会員の皆様には会費の納入方、よろしくお願い致します。

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安定の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病となり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。